

幼保小の架け橋期における小学校教育の充実についての研究

— 「言葉による伝え合い」の姿をつなぐ指導と支援の工夫 —

高知市立神田小学校 教諭 小野 由里恵
高知県教育センター 主任指導主事 宗石 麻季
チーフ 弘畑 史浦

本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中の「言葉による伝え合い」に重点を置き、園で培った「言葉による伝え合い」の姿を生かした授業づくりをすることで、園での学びや経験を小学校の学びに円滑に移行させることを目的としている。そこで、小学校と園において「言葉による伝え合い」に焦点を当て、連携する園に聞き取り調査を行った。そして、それらをもとに作成した幼児期の経験や学びを生かした国語科の授業づくりについて小学校教員と保育者で学習指導案検討を行い、検証授業を実施した。その結果、幼保小の接続を意識した指導を行うことで、児童の発達の段階を見通した円滑な教科指導への移行につながることが示唆された。

<キーワード>

言葉による伝え合い、円滑な教科指導への移行

1 研究目的

本研究の目的は、小学校1年生を対象に、園での学びや経験を生かした「話す・聞く・伝え合う」力を育む授業づくりを行うことで、児童の発達の段階を見通した円滑な教科指導への移行を図ることである。

(1) 国と高知県の現状と課題

「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」(文部科学省、2023)において、「幼児教育と小学校教育においては、教育課程の構成原理など様々な違いを有することから、とりわけ義務教育の開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間の『架け橋期』は、幼保小が意識的に協働して子供の発達や学びをつなぐことにより、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくることが重要である。」とある。このことから、架け橋期において、幼保小が学びの連続性を踏まえつつ、幼児期の教育が小学校で生かされるような円滑な接続を図ることが重要視されていると考えられる。

高知県においても、幼保小の円滑な連携・接続に向け、文部科学省から「幼保小の架け橋プログラム事業」を受託し、カリキュラムづくりを通して子どもをまんやかにした話し合いから学びをつなぐ架け橋プログラムの取組を行っている。高知県教育委員会事務局幼保支援課が実施した「令和5年度保幼小連携・接続の実施状況アンケート」によると、保育者と小学校教員が連絡会や交流会等を3回以上実施した小学校の割合は62.9%で、令和4年度より4.7%増加していた。しかし、連絡会の内容に着目すると、子供たちの育ちや支援についての引継ぎは96.7%の小学校が実施しているが、子供たちの育ちつつある姿等を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を通して語り合ったり共有したりしている小学校の割合は、31.7%にとどまっている。「第3期教育等の振興に関する施策の大綱・第4期高知県教育振興基本計画」(2024)においては、課題として「保幼小連携・接続において、互いの教育内容を理解し合い、それぞれの指導に生かす『学びをつなぐ』取組が浸透しているとは言えない現状があります。」と述べられている。政策のポイントとして、保幼小の円滑な連携・接続に向け、県内全域において「学びをつなぐ」取組を支援することが挙げられている。幼児期の教育と小学校から実施される義務教育とを円滑につないでいくためには、幼保小が連携し、子供の成長を中心に据え、発達の段階を見通した教育を充実させていくことが必要とされていると

言える。

(2) 研究協力校の現状と研究の方向性

本研究は、高知県内のA小学校に研究協力を依頼した。A小学校の現状にも、国や県と同様の課題が見られる。A小学校は、毎年複数の園から新入生が入学する大規模校であり、保育者と小学校教員の連絡会は行われているが、園と小学校の学びのつながりについて考えたり、お互いの教育について話し合ったりする場が十分でなく、園での経験や学びを通して育まれた力を小学校教育に生かす授業づくりに課題があった。このような、A小学校区の課題を改善するため、近隣の園と連携して、指導方法を共に考えていく必要があると考えた。

本年度の1年生児童の4月の実態を観察してみると、好奇心旺盛で、興味があることや新しいことに意欲的に取り組む姿が見られた。一方、授業では、相手の話を集中して聞くことに課題がある児童や、思うように自分の思いを言葉で伝えることが難しい児童も見られた。また、1年生担当教員4名を対象に行った「スタートカリキュラム実施時期の児童の様子に関する調査」では、担任の多くが、相手が伝えようとしている内容に注意を向けて聞くことが難しい児童がいるなどの課題を感じていることが分かった。このような実態を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説、2018)に照らし合わせてみると、「言葉による伝え合い」の点に課題があるのではないかと考えた。そして、「言葉による伝え合い」の力は小学校の全ての教科や領域で伸ばしていくものであるが、言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科において、言葉の力、伝え合う力を高めるため、言葉による見方、考え方を働かせ、言語活動を通して国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成したいと考えた。そこで、この研究では、幼児期に育まれた「言葉による伝え合い」の力を園での学びや経験を生かして小学校でさらに育てていきたいと考える。そのためには、幼児期に育まれた「言葉による伝え合い」の力を、小学校国語科での学びに円滑に移行させることが大切であると考えた。

無藤(2011)は、『10分間トレーニング 保育の学校 言葉による伝え合い』の中で、「言葉の領域のポイントは、話そうとする→人の話を聞く→言葉による伝え合いができるという3つです。この、『話す、聞く、伝える』ということをもっと充実させていきましょう。」と述べている。また、「聞くことは伝え合うことの一部」とも述べている。「話す」「聞く」が「伝え合う」の一部であることから、教師は、「伝え合う」だけでなく子供の「話す・聞く・伝え合う」という一連の育ちを理解し、把握することが大切であると考えた。このことから、本研究のA小学校での取組においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「言葉による伝え合い」の力を、小学校国語科における「話す・聞く・伝え合う」力と捉えて進めていくこととする。

2 研究仮説

園での学びや経験を生かした「話す・聞く・伝え合う」力を育む授業づくりを行うことで、児童の発達の段階を見通した円滑な教科指導への移行を図ることができるだろう。

3 研究方法

(1) A小学校区の実態調査

ア 園における「言葉による伝え合い」の育ちに関する聞き取り調査

時 期：6月12日～26日

対 象：「令和6年度 B市保・幼・小連携推進地区事業」(以下、「連携推進地区事業」という)で連携する校区内外の5園の管理職、本年度年長児担任、昨年度年長児担任

調査内容：

連携推進地区事業で連携を行う校区内外の5園において、「言葉による伝え合い」を育むために、どのような取組を行っているのか、どのような環境構成や援助を行っているのかなどを聞

き取り、「言葉による伝え合い」の育ちの実態を把握する。また、令和6年度のA小学校1年生が、年長時にどのような力を育んできたのかを明らかにし、小学校との学びのつながりを意識した学習計画を立てる。調査内容は、「言葉による伝え合い」に関する項目とし、聞き取った内容は、①言葉による伝え合いの様子②環境構成や援助の項目にまとめる。

イ A小学校における「話す・聞く・伝え合う」に関する育ちの目指す姿の調査

時 期：令和6年5月17日～6月26日

対 象：A小学校の全学年の学級担任

調査内容：

A小学校の全学年の学級担任に「話す・聞く・伝え合う」に関する育ちの目指す姿についての聞き取り調査を行い、学年間の系統性を明らかにするために、A小学校の「話す・聞く・伝え合う」育ちの軸を作成する。そこに園での聞き取り調査の結果も加え、5歳から6歳にかけて育みたい力を伸ばすためのA小学校区が目指す「話す・聞く・伝え合う」子供像を設定する。

(2) 「言葉による伝え合い」の姿を発揮させるための指導計画の作成と実施

ア 「話す・聞く・伝え合う」力を育む学習計画の作成

作成方法：

園で聞き取った幼児期の「言葉による伝え合い」の姿を踏まえた学習計画を作成する。学習指導案には、保育者が生活や遊びの中で大切にしてきたことや保育に取り入れてきた環境構成や援助等を小学校の授業に生かすために、「幼保小接続を踏まえた指導の工夫」と「幼保小の接続を意識した指導」という項目を設け、幼保小の接続を踏まえた指導をする上で、大切にしたいことを明確にする。

イ 学習指導案検討会

時 期：令和6年9月13日

対 象：連携推進地区事業で連携する校区内外の5園の管理職、本年度年長児担任、昨年度年長児担任、A小学校管理職、1年生担任

内 容：

研究者が「幼保小の接続を意識した指導」を取り入れて作成した指導計画について、保育者と1年生担任とともに検討する。A小学校区が目指す「話す・聞く・伝え合う」子供像を保育者と1年生担任とで共有し、検討で出された意見を参考に、学習指導案を改善する。また、検討した学習指導案による検証授業を参観する際に使用する授業参観シートについて説明し、授業参観で見取ってほしい視点を伝える。

【授業参観の視点】

- ①友達と関わる中で、「自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたり、自分の言葉で伝え合ったりする」ことを楽しんでいる姿
- ②その姿につながった環境構成や教員の支援
- ③明日からの実践につなげるために加えたい環境構成や教員の支援

ウ 検証授業

時 期：令和6年10月1日～10月8日（全6時間）授業公開10月7日

対 象：A小学校第1学年1組児童30名

単 元：「はなしをたのしくつないでおはなし名人になろう」

教 材：国語科「なにに見えるかな」東京書籍1下

調査方法：

「言葉による伝え合い」に重点を置き、国語科「A話すこと・聞くこと」の単元における幼児期の経験や学びを生かした検証授業を行い、「幼保小の接続を意識した指導」（表4）の（ア）から（オ）を取り入れた授業づくりが有効であったかを検証する。また、授業の終末の児童の

振り返りや、参観者の授業参観シートの記述内容から、児童一人ひとりの学びの姿や意識の変容を見取り、授業改善や授業づくりの検証につなげる。

エ 事後研修

時 期：令和6年10月7日

対 象：連携推進地区事業で連携する校区内外の5園の管理職、本年度年長児担任、昨年度年長児担任、A小学校管理職、1年生担任

内 容：

授業参観シートを活用し、児童が友達と関わる中で、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたり、自分の言葉で伝え合ったりすることを楽しんでいる姿やその姿につながった環境構成や教員の支援などについて公開授業で見取ったことを共有し、今後のA小学校区の学びの接続を図るための協議を行う。協議はKJ法で行い、参観者が検証授業で見取った子供の姿から授業者と参観者が環境構成や支援について学び合う。本研究での事後研修の進め方は、「指導計画・園内研修の手引き～つころう 笑顔の輝く明日の保育～【改訂版】」（高知県教育委員会事務局 幼保支援課、2020）を参考にする。また、事後研修後に参観者へアンケートを行い、保幼小連携の取組の感想について調査する。

オ アンケート調査

時 期：令和6年9月国語科「はなしたいなききたいな」教材終了後

令和6年10月国語科「なにに見えるかな」教材終了後

令和6年11月国語科「すきなきょうかをはなそう」教材終了後

対 象：A小学校第1学年1組児童30名

調査方法：

児童一人ひとりの支援に役立てるとともに、幼児期の経験や学びを生かした伝え合いが生まれてくるような授業づくりが有効であったかを検証するためにアンケート調査を実施する。設問内容は次の①から⑥とし、設問①から③が「できた・だいたいできる・あまりできない・できない」、設問④から⑥が「たのしい・まあまあたのしい・あまりたのしくない・たのしくない」の四件法で行う。アンケート結果は、児童の振り返りと関連させ、検証授業の前後で学習に対する意識の変容が見られた児童においては、どのような理由で意識の変容があったのかについて該当児童や担任教員に聞き取り調査を行う。

所要時間：5分

【設問内容】①じぶんのかんがえをあいてにつたえることができましたか。

②あいてのはなしをきくことができましたか。

③あいてにかんそうをつたえたりしつもんしたりすることができましたか。

※①の質問とは違い、友達の話を受けて、話題に沿って話をつなぐことができているかという視点であることを児童に確認してから回答させる。

④じぶんのかんがえをあいてにつたえることは、たのしいですか。

⑤あいてのはなしをきくことは、たのしいですか。

⑥あいてにかんそうをつたえたりしつもんしたりすることは、たのしいですか。

4 結果

(1) A小学校区の実態調査

ア 園における「言葉による伝え合い」の育ちに関する聞き取り調査

「言葉による伝え合い」における幼児期の経験や学び等に関するA小学校区内外の5園に対する聞き取り調査の結果を整理した(表1)。行事や朝の会では、活発に自分の考えを提案する幼児の様子が見られる一方で、強い言葉で相手を攻撃してしまう実態や落ち着いて話を聞くことがで

きる状況をつくるのが難しい実態などがある。

表1 園への聞き取り調査結果

| ①言葉による伝え合いの様子 | ②保育者の環境構成や援助 |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ●話を聞くことができる状況が長続きせず、幼児と話し合うことが難しい実態があった。 ●全体での活動の際は、発言する幼児が固定化されていた。 ●自分の気持ちを相手に伝える姿はあまり見られず、保育者を介して相手に自分の気持ちを伝えていた。 ●自分の思いはあるが、発言の仕方が分からない、言葉が出てこない幼児が見られた。 ●クイズを取り入れると楽しんで聞いていた。 ●当番活動のグループ名を班(5人)で決める話し合い活動を行った。 ●お化け屋敷を開催する際、年下のクラスにも来てもらうために、案を出し合ったり、あいさとお表を見ながら看板やチケットに文字を書いたりなど工夫していた様子が見られた。 | <ul style="list-style-type: none"> ●帰りの会で「ほめほめタイム」を設定し、毎日友達の良いところを伝え合っていた。 ●帰りの会で「伝えたいこと」コーナーを設定し、幼児が皆に伝えたいことを発表したり、クイズを作り、皆に答えてもらったりしていた。 ●黒板に1日の流れを文字で書いたり歌詞や詩などを掲示したりして、文字を身近に感じられるよう工夫する。 ●詩や歌、言葉遊びなどを通して、新しい表現に触れ、言葉で表現する楽しさを味わわせていた。 ●日常生活や遊びの中で、友達同士で手紙を書き、文字で思ったことや考えたことを伝え合えるように紙を用意していた。 ●「さるかに合戦」の劇の展開について意見を出したり、登場人物の台詞を考えたりしていた。 ●クイズやゲームを取り入れると、楽しんで聞くことができたり発言を促したりすることができた。 ●自分の思いを伝えることが難しい幼児には、保育者が抱えている思いを受け止めたり、言語化したりしていた。 ●幼児の相手意識の芽生えを願って保育をしていた。 |

イ A小学校における「話す・聞く・伝え合う」に関する育ちの目指す姿の調査

園で聞き取った幼児期の「言葉による伝え合い」の育ちの姿(表2「幼児期」)とA小学校の各学年の担当に聞き取った「話す・聞く・伝え合う」に関する育ちの目指す姿(表2「児童期」)を育ちの軸としてまとめた。幼児教育と小学校教育の目指す姿には、教育課程の構成に違いがあり、目指す姿に乖離があるため、年長児と1年生の成長を切れ目なく支えるための教員の指導と支援を検討し、A小学校区が接続期に目指す「話す・聞く・伝え合う」子供像を設定した(表3)。

「話す」ことについては、児童が「話してみたい」「聞いてみたい」という思いが湧くような単元づくりや言語活動などを取り入れ、児童が自らの思いや願いを実現できるような活動を設定することで、児童の「話したい」「伝えたい」という気持ちにつなげていくことができると考え、目指す子供像を「相手に伝わるように自分の考えを話す」と設定した。「聞く」ことについては、相手の思いを大切にしていることを表す仕草や相手の意見を受け入れることを表す聞き方等を知識として教えることで、自分の意見を受け入れてもらえる体験をさせることができると考え、目指す子供像を「相手の思いを受け止め、共感しながら聞く」と設定した。「伝え合う」ことについては、児童の伝えたい思いを他の児童に伝える機会や、集団の中で自分の思いを表現させる場を設定することで、伝え合う喜びや楽しさを味わわせることができると考え、目指す子供像を「話がつながることの楽しさや良さを実感しながら伝え合う」とした。

表2 A小学校区の「話す・聞く・伝え合う」育ちの軸

| 発達段階 | 幼児期 | | | 児童期 | | | | | |
|------|----------------------------------|----------------------------------|--|---|--|--|-----------------------------------|---------------------------------|--|
| | 年少(3歳児) | 年中(4歳児) | 年長(5歳児) | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | 5年生 | 6年生 |
| 話す | ・相手との間に安心して言葉を交わらせる雰囲気や信頼関係が成立する | ・経験したことや考えたことを自分なりに話そうとする | ・体験したことや考えたことなどを自分なりに話そうとする ・自分が思ったことや考えたことを言葉で説明する | ・相手の話の内容を理解したうえで話題に沿って話す | ・事柄の順序を考えながら、相手に分かるように話す | ・順序や考え、話の要点や中心点がよく分かるように話す ・目的や場に応じて、丁寧な言葉で話す | ・自分の考えを具体的な事例や理由を挙げながら話す | ・相手の話を聞きながら、自分の意見と比較しながら話す | ・意思や根拠を明らかにして自分の考えを述べる ・組み立てを考慮して、趣旨のはっきりした話をする ・話題からそれずに、自分の考えを述べる |
| 聞く | ・親しい相手の言葉に興味や関心をもって聞く | ・自分の話を聞いてもらうことにより、自分も相手の話を聞こうとする | ・自分の気持ちに折り合いをつけ、相手の思いを受け入れて、相手の話を聞く | ・相手の話に関心をもって聞き、相手の話を理解する | ・大事なことを聞き逃さないように聞く ・相手の話に関心をもって聞き、相槌を打つなどの反応をする | ・話の内容を正しく聞き取る ・話し手の立場を尊重しつつ、自分の感情をもって聞く | ・相手の意図を理解しながら聞き、自分なりの考えをもつ | ・自分の意見を持ちながら、相手の話を理解しながら聞く | ・話し相手の意図を正確に聞き取る ・事象と感想、意見を聞きながら正確に聞き取る ・相手の立場や意見を尊重しながら聞く |
| 伝え合う | ・相手の話や思いが分かる楽しさや喜びを感じる | ・周囲の人々の会話の仕方や話し方を聞き、自分も話そうとする | ・相手の話を聞き、自分も相手に話そうとし、相互に伝え合う喜びを感じ合う | ・相手の発言を受けて質問する、復唱して確かめる、共感を示す、感想を言うことで話をつなぐ | ・自分が聞きたいことを聞き逃さないように聞き、もった感想を順序立てて話す | ・話題に合った自分の考えを述べる ・顔や相槌を傾けたり首を反応しながら聞く ・相手の話を尊重しながら聞く | ・相手の話を聞いて質問したり感想を伝えたりし、相手から対話を楽しむ | ・相手の意見を聞き、補足したりより詳しくしたりして、話をつなぐ | ・話し合いでの考えの違いや類似点を踏まえ、自分の考えを整理して発言できる ・相手の意見に理解、共感、批判、向上を示す ・他者との関係性を築こうとし、新しい価値を創造しようとしている |

表3 接続期の指導と支援についての考察

| | 授業における指導 | 教員の支援 | | A小学校区が接続期を目指す「話す・聞く・伝え合う」子供像 |
|------|--|--|---|------------------------------------|
| 話す | 授業において、自分の思いを伝えるための話型を示したり伝え方を提案したりするなどの支援をすることで、自分の考えを伝える力をつけることができるであろう。また、児童の「話してみたい」「聞いてみたい」という思いが湧くような単元づくりや言語活動などを取り入れ、児童が自らの思いや願いを実現できるような活動を設定することで、具体的な活動や体験が伴い、見つけたり、遊んだり、不思議だなと感じたり、やってみたいなと思ったりしたことを、児童の「話したい」「伝えたい」という気持ちにつなげていくことができるであろう。 | 児童の表現が不十分でも、教員が思いを汲み取り、応えていくようにし、的確な言葉で代弁・表現する援助を行うことで、子供たちの言葉で表現することへの安心感や話すことへの意欲につなげることができるであろう。また、そのような支援を行うことで、児童が安心して話すことができる雰囲気づくりにもつながり、コミュニケーションの情緒的側面も育むことができるであろう。 | ⇒ | 話す 相手に伝わるように自分の考えを話す |
| 聞く | 授業において、相手の思いを大切にしていることを表す仕草、相手の意見を受け入れることを表す聞き方を知識として教えることで、自分の意見を受け入れてもらえる体験をさせることができるであろう。また、そのような体験から、自分も相手の話を理解しようとする心情が育まれるであろう。 | 教員が、児童の言葉をしっかり受け止め、十分に聞くことで、児童は、自分の気持ちが相手に伝わっていると実感でき、相手の言葉にも耳を傾けることができるようになるであろう。また、温かく共感的に聞くことで、信頼関係が生まれ、児童の自己表出することへの抵抗感を軽減すると考えられる。このように聞き合い、協同的に考え合う雰囲気づくり、その快さを体得させることがコミュニケーション力を付ける上で大切な土台作りとなるであろう。 | ⇒ | 聞く 相手の思いを受け止め、共感しながら聞く |
| 伝え合う | 伝え合う楽しさを味わわせるためには、授業において、話がつながっていく楽しさを感じる体験をさせることが必要であるため、話を楽しくつなぐ言葉を見つけて話をつなぐ体験をさせることで、伝え合う喜びや楽しさを味わわせることができるであろう。 | 教員が児童の伝えたい思いを他の児童に伝える機会や、集団の中で、自分の思いを表現する場を設けるといった支援を行うことで、楽しく話をつなぐことができるであろう。また、伝え合いを積み重ねることで、友達との学び合いの楽しさや話がつながる安心感を感じることができ、クラスの友達と交流し合って学ぶ楽しさや、やりがいを感じられるであろう。 | ⇒ | 伝え合う 話がつながることの楽しさや良さを実感しながら伝え合う |

(2) 「言葉による伝え合い」の姿を発揮させるための指導計画の作成と実施

ア 「話す・聞く・伝え合う」力を育む学習計画の作成

園で聞き取った幼児期の「言葉による伝え合い」の姿や保育者の環境構成や援助を学習計画に反映させるため、A小学校区の「幼保小の接続を意識した指導」を設定した(表4)。具体的には、「意欲をもたせるために、クイズ形式を活動の中に取り入れた」という保育者の援助を踏まえ、毎時間の授業の中で教員が作成した「なにに見えるかなクイズ」を位置付ける等、児童の発言を促すような指導を授業の中に取り入れた。また、園において、幼児が自分の思いを言葉で表現することが難しい際には、保育者が幼児の思いを受け止め、その思いを言語化したり伝え方を提案したりして、「言葉による伝え合い」ができるように援助を行っていたことを踏まえ、小学校の授業においても、児童が安心して自分の思いを表現できるよう、作品を紹介するための話型や今まで児童が集めてきた話を楽しくつなぐこつを掲示しておき、確認しながら自分の作品を紹介できるような支援を指導計画に取り入れた。

表4 幼保小の接続を意識した指導

| |
|---|
| (ア) 児童が言葉で伝えたくなくなるような課題を設定する。 |
| (イ) 自分の考えを伝え、教員や友達が話を聞いてくれる中で、相手と思いを共有することの楽しさや良さを実感できるようにする。 |
| (ウ) 児童の状況に応じて、言葉を付け加えるなどして、児童同士の話が伝わり合うように支援する。 |
| (エ) 学校生活の中で身近なことを表す言葉などに触れさせ、児童の使用する語句の量を増やす。 |
| (オ) 児童が安心して自分の思いを表現できるように、児童の言葉をしっかり受け止め、信頼関係を構築したり、児童が自己発揮できるような環境を整えたりする。 |

イ 学習指導案検討会

A小学校区が目指す「話す・聞く・伝え合う」子供像を保育者と共有し、園で育まれた資質・能力を踏まえた授業づくりのため、幼児期の学びや経験について話し合った。園からは、秋に興味をもたせるための環境設定の工夫や秋の自然物を使ったお面遊びやポシエットづくりなどの活動を行ったという事例などが示され、幼児期の学びや経験と教科のつながりについて、保育者と教員が話し合うことができた。また、園では、保育者がどうしたいかを問いかけて解決を幼児に任せることで、主体的な活動を促したり、様々な方法を試すことができるような環境を整備したりしているため、小学校においても、児童がやりたいと思ったことを実現できるような授業を仕組むようにするとよいという意見が出された。

学習指導案検討会や聞き取り調査で得られた幼児期の「言葉による伝え合い」の姿を踏まえた学習指導案に修正した(表5)。

表5 1年生 国語科単元「なにに見えるかな」の授業計画（全6時間）

| 次 | 時 | ○学習活動 | ・指導上の留意点 ◎幼保小接続を踏まえた指導の工夫 【幼保小の接続を意識した指導】 |
|---|-----------|--|---|
| 一 | 1 | ○学習課題をつかみ、話し合うことに関心を持ち、学習計画を立てる。 | ◎生活科で作成した作品の中から一番のお気に入りを選んで友達を紹介することを伝え、活動への意欲を高める。【接続(ア)】 ◎学習課題に興味・関心がもてるように、教室内に関連図書を設置し、児童の学習意欲を高める。【接続(オ)】 ◎これまでに、楽しく話をつないだ経験を想起させ、話し合いを楽しくつなげるにはどうしたらよいかを考えさせ、児童の意見を取り上げながら学習計画を立て、教室に掲示し、児童が学習の見通しをもつことができるようにする。【接続(エ)】 |
| 二 | 2 | ○提示された写真を見て、思い付いたことや質問したいことを発表する。 ○自分が紹介する作品について、出てきそうな質問を考え、紹介文をノートに書く。 | ◎導入に「なにに見えるかな」クイズを設定し、児童の発表したい意欲を高める。【接続(ア)】 ・教員が教科書に掲載されている写真を提示して、何に見えると思ったかを話し合わせる。このとき、どんな質問ができそうかも合わせて考えさせる。 |
| | 3 | ○話を楽しくつなぐ言葉を意識しながら、ペアで提示された写真について話し合う。 | ◎話し合いごとに、新しく見付けたことや困ったことなどを共有させ、気付いた案を使って話し合いが続くよう支援する。【接続(ウ)】 ◎児童が見付けた話を楽しくつなぐ言葉は、話し合う際に活用できるように短冊に書き残し、「言葉貯金」として教室に掲示する。【接続(エ)】 ◎望ましい話し合いの仕方をしているペアやグループを取り上げ、皆の前でロールプレイさせることで、やり取りの回数を増やしたり、気付いたことを使ってみたいという意識を高めたりすることにつなげる。【接続(ウ)】 |
| | 4 | ○前時に見つけた、話を楽しくつなぐ言葉を使ってグループで提示された写真について話し合う。 | ・教科書に掲載されている写真から提示した1枚に対して、三人一組のグループを作って話し合わせる。 ◎友達の話し方や聞き方の良いところを見付けて発言させる。【接続(ウ)】 ◎言葉貯金やつなぐ言葉、句型などを使ってよいことを伝える。【接続(エ)】 |
| | 5 (本時) | ○単元を通して見つけた、話を楽しくつなぐ言葉や仕草を使ってグループで自分の作品について話し合う。 ○付箋に友達の作品の感想や良いところを文字で伝え合う。 ○制作コーナーで制作する。 | ・児童が挙げた言葉や仕草を分類してまとめ、「話を楽しくつなぐ言葉の力」として共有させる。 ◎皆でまとめた「話を楽しくつなぐ言葉の力」を意識させて楽しく話し合いができるようにする。【接続(イ)】 ◎話し合いが終わった班は、友達に作品の感想や良いところを付箋に書いて伝え合えるようにする。【接続(オ)】 ◎制作コーナーに秋の自然物を設置し、友達の作品を見てやってみたい、自分の作品に付け足してみたいと思ったことが実現できるようにする。【接続(オ)】 |
| 三 | 6 | ○単元の学習を振り返り、学んだことをこれからどのように生かしていきたいのかを考える。 | ◎単元を通して頑張ったことや成長したと思うことを発表することで、これからの学習や実生活で活用したい場面を考えることができるようにする。【接続(ア)】 ・今後予定している他教科の学習活動や休み時間における会話などにおいて、児童が学んだことをどのように活用していきたいかをイメージできるようにする。 |

(太枠は、公開授業の学習計画。)

ウ 検証授業

検証授業を「幼保小の接続を意識した指導」の五つの視点で整理し、結果を示す。

(ア) 児童が言葉で伝えたいような課題を設定する。

本単元において、児童は、生活科で作成した作品の中から一番のお気に入りを選んで友達に紹介することへの興味関心が高まり、どの作品を選んで紹介するのか、どのように紹介するのかなど、楽しみながら学習に取り組んでいた。単元の導入部分では、教員同士の対話の動画を見て、話が楽しく続いている理由を考え、積極的に自分の考えを発表する児童の様子が見られた。また、これまでの経験を想起させ、話し合いを楽しくつなげるには何が必要かを考えさせることで、児童の意見を取り上げながら学習計画を立てることができた。

(イ) 自分の考えを伝え、教員や友達が話を聞いてくれる中で、相手と思いを共有することの楽しさや良さを実感できるようにする。

自分の作品をどのように紹介するとよいかを迷っている児童が見られたため、紹介文の句型を作成し、本時において、自分の作品を紹介する見通しをもたせるようにした。その結果、自信をもって、自分の作品を友達に紹介する児童が増えた。また、自分で制作した秋の作品について、児童がタブレットを見せながら何に見えるかをグループで話し合う場面では、交互に発言できるよう友達に話題を振ったり、共感しながら相手の話を聞いたりするなど、互いに認め合う雰囲気や大事にしなが話し合う姿が見られた。

(ウ) 児童の状況に応じて、言葉を付け加えるなどして、児童同士の話が伝わり合うように支援する。

第3時から第5時において、児童が自分で制作した秋の作品について、タブレットで写真を見せながら何に見えるかをグループで話し合う場面では、会話が續かないグループが見られた。そこで、教員がヒントカードで質問する言葉を提案したり一緒に考えたりするようにした。その結果、質問に迷っていた児童が、ヒントカードを見ながら友達に質問する姿が見られた。

(エ) 学校生活の中で身近なことを表す言葉などに触れさせ、児童の使用する語句の量や範囲を広げるようにする。

「話を楽しくつなぐ言葉」を意識しながら、作品について話し合う場面では、児童が見つけた「話を楽しくつなぐ言葉」を、話合いに活用できるように教員が短冊に書き残し、言葉貯金として教室に掲示するようにした。その工夫により、やり取りに詰まっても、言葉貯金を参考にしながら相手に質問をしたり感想を伝えたりする姿が見られた。また、教員が話合いごとに新しく見つけた言葉を共有し、児童に広めるようにしたことで、児童は、新しく見つけた言葉を使って話をつなぐことができていた。

(オ) 児童が安心して自分の思いを表現できるように、児童の言葉をしっかり受け止め、信頼関係を構築したり、児童が自己発揮できるような環境を整えたりする。

本単元において、担任は、児童の発言に相づちを打ちながら聞くことを心掛け、児童が発言したくなる雰囲気を作り出すようにした。教員が児童の良さを認めて褒めたり、プラスの評価を伝えたりすることで、児童が安心して発言する姿が見られた。

エ 事後研修

A小学校区で目指す「話す・聞く・伝え合う」子供像をもとに、参加者から、検証授業の中で見られた児童の「話す・聞く・伝え合う」様子、幼保小接続の観点で小学校に取り入れると良い支援などについての意見が出された。視点①「友達と関わる中で、『自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたり、自分の言葉で伝え合ったりする』ことを楽しんでいる姿」については、「自分の作品について質問してもらおうと自分に興味をもってくれていると感じ、より嬉しそうにいきいきと答えていた。」などの姿が見られたということであった。視点②「その姿につながった環境構成や教員の支援」では、『話を楽しくつなぐこつ』が手元にあることで、児童が困ることなく話をつなぐことができていた。」などの意見が出された。視点③「明日からの実践につなげるために加えたい環境構成や教員の支援」では、「言葉貯金の支援も良かったが児童から自然な言葉を引き出していくために、児童の興味関心に沿った遊びや場の設定を取り入れていく。」「振り返りの観点は、『できなかったこと』ではなく『難しいと感じたこと』などに言い換えると、改善点を考えることにつながる。」などの意見が出された。

また、授業後のアンケートにおいて、保育者からは、「児童の具体的な姿をもとに協議したことで、園と小学校の学びのつながりが感じられた。」などの感想があった。また、小学校教員からは、「保育者と協議をする中で、子供の見取りには様々な見方があることが分かった。保育者は丁寧に子供の姿を観察しており、子供たちの見取りの視点が参考になった。」などの感想があった。

オ アンケート調査

「幼保小の接続を意識した指導」を取り入れる前後（前：9月、後：10月検証授業実施後）と、指導を継続した授業後（11月）について児童の回答結果を比較した（図1～3）。設問①と④を「話す」観点、設問②と⑤を「聞く」観点、設問③と⑥を「伝え合う」観点とし、児童の回答を分析した。

「話す」観点

設問①において「できる、だいたいできる」と回答した児童が11月は9月より17.3%増え、96.6%の児童が肯定的に捉えるようになった。設問④においては「たのしい、まあまあたのしい」と回答した児童が11月は9月より17.3%増え、100%の児童が肯定的に捉えるようになった。

設問①において9月は「できない」と回答していた児童Cが10月には、「あまりできない」と回答していた。そのため、教員が話し合いの際に、児童に質問や感想の例が書かれたヒントカードを渡して、グループの友達と話をつなぐ支援を行った。その後、児童Cは、ヒントカードの中から、作品に合った話題を探して質問した。11月の授業で児童Cは、ヒントカードがなくても、自分で考えて相手に質問することができ、11月のアンケート調査においても、「できる」と自らを肯定的に評価していた。担任教員への聞き取り調査においても、前述の児童Cは「相手から質問されれば、自分の思いや考えを伝えられるようになった。また、質問の仕方が分からないときは、教員がどのように質問すると良いかの例を示すと、言葉貯金の中から使える言葉を選んで話をつなぐことができるようになった。」という回答があった。

また、設問④において9月は「たのしくない」と回答していた児童Dに対し、教員は話す楽しさを伝えるため、話をつなぐときの仕草について触れ、笑顔で話をするように促している方も楽しくなることなどに気付かせるようにした。さらに、話をつなぐ仕草の例を書いたヒントカードを教室に掲示したことで、児童Dは言葉だけではなく、友達の話に相づちを打ったり笑顔で話をしたりするなど仕草にも気を付けて話す姿が見られるようになった。11月の授業で児童Dは、話し合いの際に、「次、質問どうぞ。」「～さん、何か質問ある？」など、グループで楽しく話すことができるように友達の発言を促していた。11月のアンケート調査においても、「まあまあたのしい」と回答していた。担任教員への聞き取り調査においても、前述の児童Dは「相手の発言に対して、自分が行動したことや経験したことに基づいて自分の考えを言えるようになった。」という回答があった。

「聞く」観点

設問②において「できる、だいたいできる」と回答した児童が11月は9月より13.8%増え、96.6%の児童が肯定的に捉えるようになった。設問⑤においては「たのしい、まあまあたのしい」と回答した児童が11月は9月より10.3%増え、93.1%の児童が肯定的に捉えるようになった。

設問②において9月に「できない」と回答していた児童Eは、検証授業の当初から友達の話に質問したり感想を伝えたりする様子がなく、話し手の知らせたいことを聞き逃さないように聞くことができているかどうかをこちらが判断できない児童であった。そこで、話し手の話の内容を捉えて聞くことができているのかを判断するために、教員がヒントカードを用いて支援した。しかし、友達が質問や感想を促しても反応はなかった。ヒントカードや言葉貯金の情報量が多く、話をつなぐ言葉が選べないことが原因ではないかと考え、教員が1枚のカードに話をつなぐ言葉の一つ書いたヒントカードを複数作り、リングでとじて児童Eに持たせた。その結果、児童Eは、ヒントカードに書かれた質問を相手に問いかけることができた。11月の授業で児童Eは、友達の話に関心をもって、笑顔で聞いたり話したりヒントカードを見ずに友達に質問したりしていた。11月のアンケート調査においても、児童Eは「できる」と自らを肯定的に評価していた。担任教員への聞き取り調査においても、前述の児童Eは「相手に関心をもって、自分から質問したり相手の質問に適切に答えたりすることができるようになった。」という回答があった。

「伝え合う」観点

設問③において「できる、だいたいできる」と回答した児童が11月は9月より13.8%増え、96.5%の児童が肯定的に捉えるようになった。設問⑥においては「たのしい、まあまあたのしい」と回答した児童が11月は9月より31.1%増え、93.1%の児童が肯定的に捉えるようになった。

設問⑥において9月は「あまりたのしくない」と回答していた児童Fは、スタートカリキュラ

ム実施時期の授業においても、自分の意見に自信がもてず、自分の思いを相手に伝えることに困り感が見られた児童であった。そのため、児童Fが自信をもって作品紹介できるよう、教員は制作コーナーに秋の自然物以外の材料や新しく見つけてきた秋の自然物を追加するなどして、秋の作品づくりに関心が向くように環境を整備した。その結果、児童Fは、教員が作成したクイズ用の作品に興味をもち、設置された制作コーナーで教員の作品の真似をして作成し、教員が拾ってきた秋の自然物を用いて、紹介する作品を複数作成してタブレットに記録する姿が見られた。自分の作品を紹介する際も、自分が工夫したところや苦労したところなど、作成したときのことを詳しく話すことができていた。11月の授業で児童Fは、話し合いにおいて、相手の発言を受けて笑顔で話をつないだり、「～の話は横に寄せておいて。」「～は、教科に関係あるかな？」など友達が話し合いの流れを踏まえているか意識しながら話し合いを進めたりした。10月、11月のアンケート調査においても、児童Fは「まあまあたのしい」という項目に回答し、伝え合うことを肯定的に捉える意識が持続していた。担任教員への聞き取り調査においても、前述の児童Fは「相手の発言を受けた上で、一生懸命自分の思いを相手に伝えようとしている姿が見られるようになった。」という回答があった。

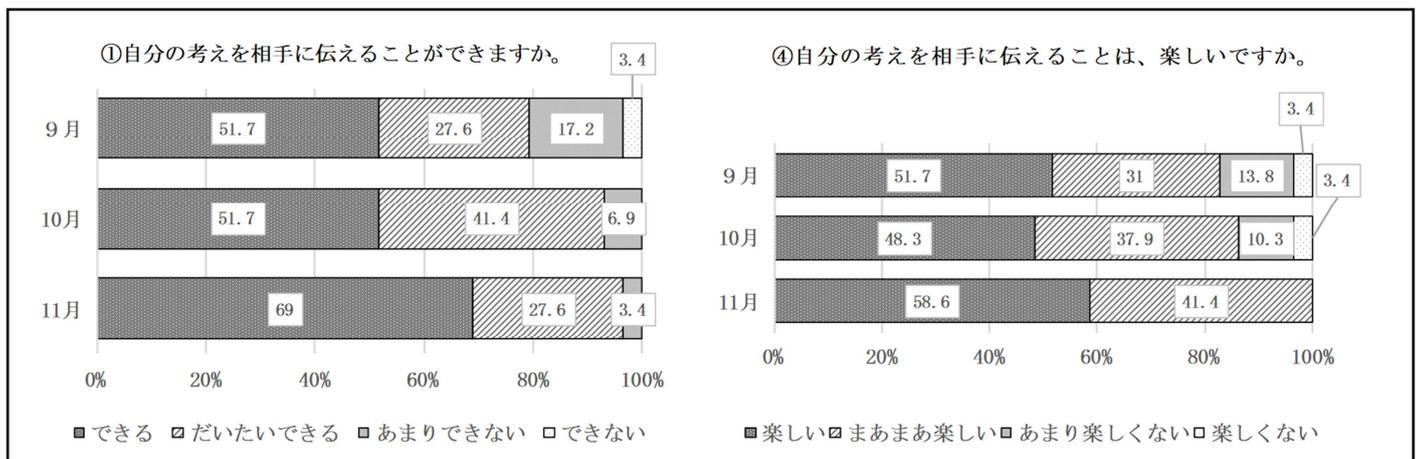


図1 「話す」観点に対するアンケート結果

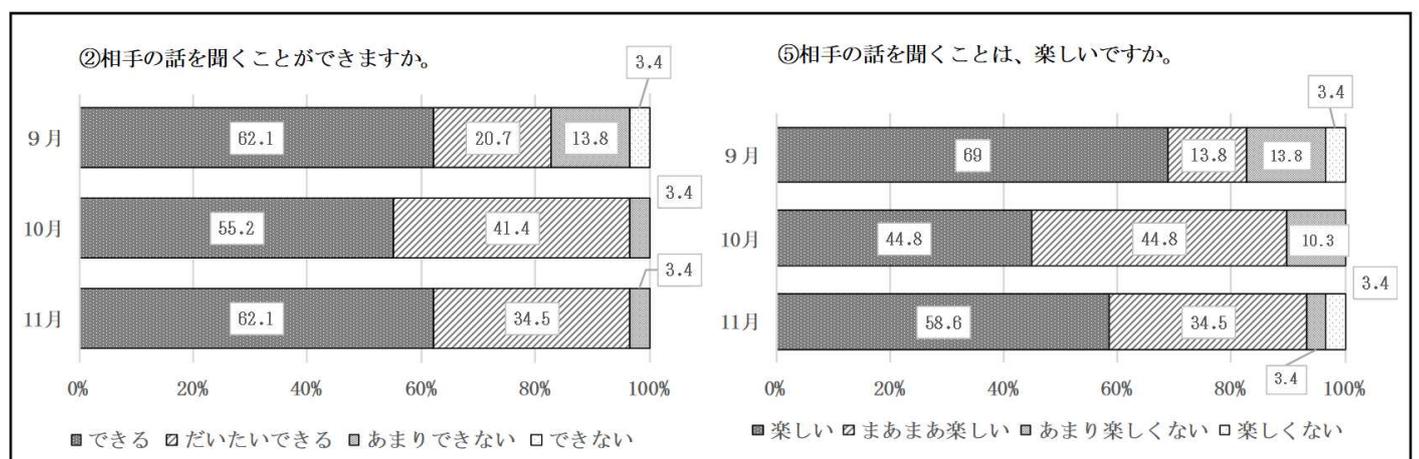


図2 「聞く」観点に対するアンケート結果

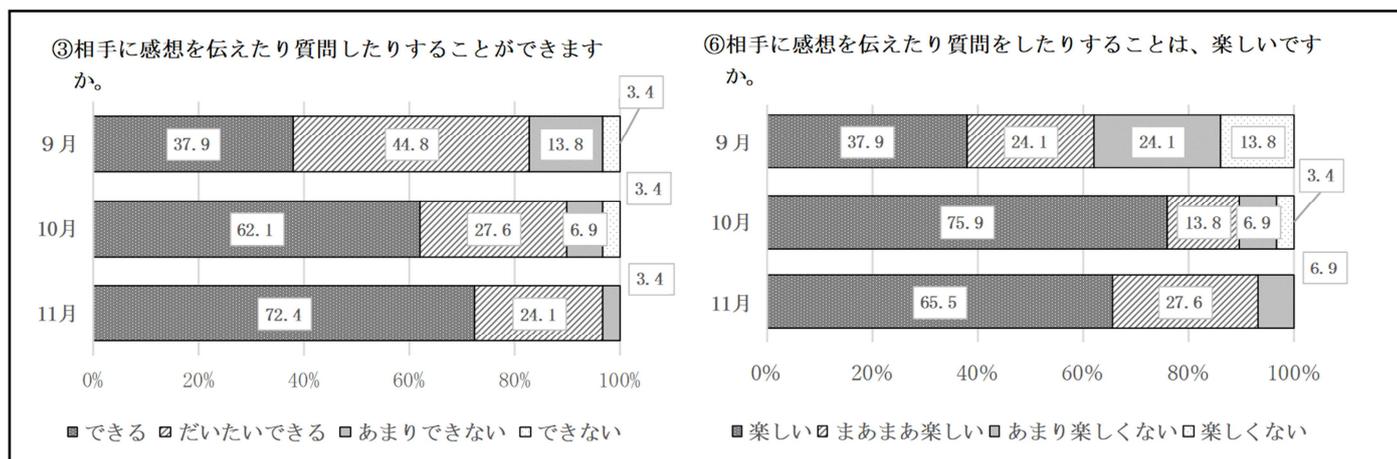


図3 「伝え合う」観点に対するアンケート結果

5 考察

本研究の目的は、小学校1年生を対象に、園での学びや経験を生かした「話す・聞く・伝え合う」力を育む授業づくりを行うことで、児童の発達の見通した円滑な教科指導への移行を図ることができたかどうかを検証することであった。そこで、園での学びや経験を生かした「話す・聞く・伝え合う」力を育む授業づくり、児童の発達の見通した円滑な教科指導への移行の2点について考察を行う。

(1) 園での学びや経験を生かした「話す・聞く・伝え合う」力を育む授業づくり

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点を手掛かりとし、「話す・聞く・伝え合う」子供の姿を園と小学校が話し合い、授業づくりを行った。保育者から聞き取った幼児期の経験を踏まえ、制作コーナーに秋の自然物や材料を幅広く用意し、作品づくりの表現を楽しむことができる環境構成を工夫した結果、児童が意欲的に秋の作品づくりに取り組むようになり、作品紹介の際に、作品づくりの過程について詳しく話すことができる支援にもつながった。また、児童のやりたいと思ったことが実現できる授業を仕組むため、児童から出された提案を授業に取り入れるようにした結果、自分の思いや考えを言葉で表現したり、その意見に興味をもって聞いたりする児童の姿が多く見られた。これらのことは、教員と児童が気軽に言葉を交わすことができる雰囲気づくりやその土台づくりのために役立ただけでなく、児童の学習意欲を高めることにもつながったと考えられる。保育者から聞き取ったことをもとに授業づくりをしたことが、児童の「話したい、自慢したい、見せたい」という気持ちを高め、本単元の「話す・聞く・伝え合う」姿に現れたのではないかと考えられる。これらのことから、園と小学校が連携して「幼保小の接続を意識した指導」を行うことは、幼児期の経験や学びを生かした「話す・聞く・伝え合う」力を育む授業づくりにつながることを示唆された。

(2) 児童の発達の見通した円滑な教科指導への移行

幼児教育と小学校教育との円滑な接続のため、昨年度の年長児の実態や保育者の環境構成及び援助の状況を把握し、接続期に目指す「話す・聞く・伝え合う」子供像を保育者と共有した。学習指導案検討会において「幼保小の接続を意識した指導」について共に検討し、学習指導を行った結果、検証授業を参観した保育者から「人前で発言することが苦手だった児童が、皆の前で堂々と発表できるようになっていた。」などの意見が出された。保育者と小学校教員が「地域の子供たちを共に育てる仲間である」という意識をもつとともに、「言葉による伝え合い」の領域で育んでいきたい力を共有することで、子供たちの育ちや学びを接続させるための連携の意識を高めることにつながったと感じた。また、保育者と小学校教員が、架け橋期に育てたい「話す・聞く・伝え合う」力について共に考えることで、幼保小接続期の教育に関する相互理解を深めたり、幼保小の学びのつながりを見つけたりするよい機会になったと考えられる。

6 成果と課題

(1) 成果

本研究では、園で培った「言葉による伝え合い」の姿を生かした授業づくりにおいて、「幼保小の接続を意識した指導」をすることで、円滑な教科指導への移行の方策について一つの提案ができた。A小学校区では、園と小学校の学びのつながりについて考えたり、お互いの教育について話し合ったりする場が十分でなく、園での経験や学びを通して育まれた力を小学校教育に生かす授業づくりに課題があった。そこで、本研究において、園への聞き取り調査や、保育者と小学校教員による学習指導案検討会を行い、保育者と小学校教員が子供たちの育ちつつある姿等を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を通して語り合ったり共有したりする場を設定し、互いの教育内容や指導方法について理解を深めるようにした。そして、そのような連携をする中で、園での経験や学びを生かした指導の工夫や教科指導の内容を考えることができた。このように、園で培った「言葉による伝え合い」の姿を生かした授業づくりを工夫することで、円滑に教科学習へ接続することができた。

(2) 課題

課題として2点挙げる。

1点目は、園と小学校が互いに連携して「幼保小の接続を意識した指導」を継続させることである。子供の発達や学びの連続性を見通した教育を持続させていくためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに互いの教育内容を話し合う機会を継続し、実践・評価・改善していく仕組みを定着させる必要がある。今後は、本研究においてA小学校区で設定した目指す子供像に向けて、園は、小学校につなぐことを意識して接続期のカリキュラムを作成・実施し、小学校は、園での学びや経験を生かした授業づくりを行うという役割を互いに自覚し、「幼保小の接続を意識した指導」を継続することで、A小学校区の架け橋期の教育の充実につなげていきたい。

2点目は、他教科での幼保小接続の推進である。今回の検証授業では、校区の実態に合わせ、園で育まれた「言葉による伝え合い」の力を生かし、話の中で使いこなせる語句や表現の量を増やしたり、言語を通して自分の考えを適切に伝え合う力を身に付けたりするために国語科で検証を行った。しかし、幼児期に育まれた「言葉による伝え合い」の力は、国語科以外の他教科においても育てる必要がある。今後は、園での経験と他教科における学びのつながりを深め、幼保小接続や授業改善に取り組み、幼児教育から教科指導への円滑な移行について研究を進めたい。

【参考・引用文献】

- 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編
- 文部科学省（2018）：幼稚園教育要領解説
- 厚生労働省（2018）：保育所保育指針解説
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
- 文部科学省（2023）：中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について ～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～
- 文部科学省（2024）：今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 最終報告
- 高知県教育委員会（2018）：高知県保幼小接続期実践プラン
- 高知県教育委員会事務局幼保支援課（2020）：指導計画・園内研修の手引き～つくろう 笑顔の輝く明日の保育～【改訂版】
- 高知県教育委員会（2022）：第3期高知県教育振興基本計画
- 高知県教育委員会事務局幼保支援課（2023）：令和5年度保幼小連携・接続の実施状況アンケート結果
- 高知県教育委員会（2024）：第3期教育等の振興に関する施策の大綱・第4期高知県教育振興基本計画
- 無藤隆（2011）：10分間トレーニング 保育の学校 5領域編 第4講 言葉による伝え合い、フレーベル館
- 安永陽子（2018）：幼児の言葉による伝え合いを育む援助に向けての実践的研究—「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」の活用を通して—